

「二つのものを一つに」(エフェソ書2:14-16)

新発田教会敬和学園大学デー礼拝説教

2022. 11. 20. 山田耕太

今朝は収穫感謝日・謝恩日礼拝と敬和学園大学デー礼拝を重ねて「二つのものを一つに」にして礼拝を奉げています。日本では古くから春に収穫を祈願し、秋に収穫を感謝する習慣がありました。アメリカでは、信仰の自由を求めてイギリスからアメリカ大陸に渡ったピューリタンらが、最初の年に飢えと寒さの中で半数以上の人々が亡くなり、生き延びた人々が収穫感謝を祝ったことから感謝祭を祝うようになりました。戦後の日本では11月23日を勤労感謝の日として取り入れ、日本の教会では11月第3日曜日を収穫感謝礼拝としています。新発田教会では収穫感謝礼拝で引退した牧師を覚えて感謝して支える謝恩日としています。その上で、敬和学園大学デーを重ねて「二つのものを一つに」して礼拝を献げています。新発田教会・新潟地区の諸教会をはじめ地域社会の皆さんが敬和学園を覚えてお支えくださいますことを心から感謝を申し上げます。

敬和学園高校は1968年に開校し、すでに1万人近くの卒業生を送り出しています。敬和学園高校出身の牧師は100人を超えていることをはじめとして、極めてユニークな教育をしています。敬和学園大学は1991年に開学し、すでに4,700人以上の卒業生が新潟県を中心に日本や世界の各地で活躍しています。敬和学園は1887年(明治20年)に開校した北越学館(男子校)と新潟女学校(女子校)というキリスト学校を精神的な前身としています。いずれも鹿鳴館時代に象徴される欧化主義の時代から教育勅語と大日本帝国憲法に象徴される国粋主義へ向かう大きな時代転換の荒波に乗り切れずに、わずか6年足らずで閉校に追い込まれました。しかし、戦後の教育基本法・平和憲法の下で、北越学館や新潟女学校を復活させたいという新潟の沢田義方(よしまさ)や新発田の井伊誠一に代表される市民の願いやモス宣教師の青少年教育への働きかけが、新潟朝禱会の祈りの中でビジョンが共有され、敬和学園が発足しました。現在キリスト教学校教育同盟に属するプロテスタントの学校は102法人あります。明治時代のキリスト教学校60校余りの中で、三分の一が欧化主義から国粋主義の大波の中で閉校しましたが、戦後にかつてのキリスト教学校の精神を復活させたのは敬和学園のみです。

新発田教会は今から134年前の1888年(明治21年)に発足しました。それはスコットランド医療宣教会から派遣されたパームの医療宣教を引き受けたアメリカン・ボードという宣教会の支援で開校した新潟女学校と北越学館は表裏一体であったのです。私たち家族は32年前に聖籠町・新発田市に移り住んで、新発田教会に属しました。31年前にこの教会で最初に説教をさせていただいた時に「二つのものを一つに」(エフェソ書2:14)と題して教会と学校の経緯について話しました。期せずして今日も同じタイトルで同じ聖書箇所から話しますが、同じ内容を繰り返しません(詳しくは『百一雑報』新発田教会社年部発行、第7~9号、1992~93年、2022年再版をご覧ください)。ただ、クリスマスに歌われる「ひつじはねむれり」は、新発田教会初代牧師の原忠美(ただよし)を支えた与板出身の三輪源蔵が作詞したこと、またそれを敬和学園高校のモス先生が英訳したことだけ付け加えておきます。

前置きから本論に入ります。今朝のテキストはエフェソ書の中心を述べた聖書箇所です。エフェソ書には二つのテーマがあります。第一は「異邦人の救い」(2:1-10)で、第二は「異邦人とユダヤ人が一つ」(2:11-22)です。それぞれローマ書の「異邦人の救い」(1-8章)と「異邦人とユダヤ人は一つ」(9-11章)を展開しています。

「キリストは私たちの平和であります。」(2:14a)すなわち「キリストは私たちの平和の源」です。それでは「平和」とは何でしょうか。「平和」(ギリシア語「エイレーネー」)とは、普通は「戦争」とは正反対の「戦争がない状態」を指します。さらに比喩的に「調和のある状態」や「秩序のある状態」を意味します。しかし、「平和」をヘブライ語では

「シャーローム」と言いますが、これには戦争と反対の意味ばかりではなく、さらに積極的に「健康」や「福祉」というもう一つの側面を意味します。この「シャーローム」の二重の意味と関連して、現代の平和学の父ヨーハン・ガルトウングの「平和の概念」が注目されています。ガルトウングは「平和」の反対は「戦争」ではなく「暴力」と断言しています。さらに「暴力」には「戦争」に代表される目に見える「暴力」と基本的な人権が脅かされていることや経済的な格差があるという目に見えない構造的な「暴力」があることを指摘しています。すなわち「平和」には、「戦争がない」という否定形表現される「消極的な平和」と「人権が守られている」という肯定形で表現される「積極的な平和」の2種類があるのです。

日本国憲法では「消極的な平和」は憲法9条で戦争しないという戦争放棄に表現されており、「積極的な平和」は憲法11条で基本的人権を守ることが記されているのです。すなわち、日本国憲法では、ヘブライ語の「シャーローム」と同じ概念が体现されているのです。一言で要約すれば、一人ひとりの人権が守られていれば、大きな争いには至らないのです。人権という概念は、簡単に言うと「一人一人は等しく尊い」ということになります。この人権概念は、究極的には人間は「神のかたち (the image of God, Imago Dei) に創造された」(創世記 1:27)に遡るのです。一人ひとりが相手は「神の似姿」であるという意識を強く持っていれば、人権侵害も戦争も起きないのです。

「二つのものを一つにし」(2:14b)、ここで言われている「二つのもの」とは、ユダヤ人と異邦人を指しています。具体的には、ユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者を指しています。キリスト教はユダヤ人の世界から始まりました。ユダヤ人世界にキリスト教を伝えていったリーダーはペトロです。異邦人世界にキリスト教を伝えていったリーダーはパウロです。共にユダヤ人でした。最初期キリスト教の多数派はユダヤ人キリスト教でした。異邦人キリスト者はパウロが異邦人に宣教した時代では極めて少数派でした。ここでは多数派のユダヤ人キリスト教と少数派の異邦人キリスト教は一つであると言っているのです。しかし、紀元66年から70年にかけてローマ帝国とユダヤの間でユダヤ戦争が起こり、圧倒的な軍事力を背景にしたローマ帝国側が勝利を収め、ユダヤ人がパレスティナを追放されて世界中に離散していった、ユダヤ人キリスト教と異邦人キリスト教の立場は逆転していったのです。パウロは、別の所で「ユダヤ人もギリシア人(に代表される異邦人)もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」(ガラテヤ3:28)とキリストにおいて人種差別も身分差別も男女差別もなく「一つである」と主張しています(ガラテヤ3:28)。ここではその中で「ユダヤ人と異邦人」という人種差別の問題を取り上げて「二つのものは一つ」と言っています。

「敵意という隔ての壁」(2:14c)の「隔て」には2種類の「壁」の表現がありました。古代のローマ時代の町は、敵からの侵入を防ぐために「城壁」(テイコス)で囲まれていました。ここで用いられているのは、家と家の間を仕切り、家の中の部屋を仕切る「間仕切りの壁」(トイコス)という言葉です。人権思想とは反対の人種差別・身分差別・男女差別の目に見えない「隔ての壁」を築いていく根底にあるのが、無意識であるにせよ意識するにしろ「敵意」です。「敵意」という感情を心の奥底でいただくことによって、目に見えない「間仕切りの壁」が築かれていくのです。

キリストの十字架において「ご自分の肉において、敵意という隔ての壁を取り壊し」(2:14c)と述べています。エルサレムの神殿は、「異邦人の庭」「(ユダヤ人の)婦人の庭」「(ユダヤ人男性のみの)イスラエル人の庭」「(祭司や大祭司しか入れない)聖所や至聖所」など間仕切りの「隔ての壁」で仕切られていました。しかし、キリストが「十字架を通して」これらの「間仕切りの壁」を壊して「二つのものを一つにして」「一人の新しい人に造り上げて平和を実現したのです」(2:15)。それがキリストの十字架の意味です。それが「キリストの体」を形成していく教会という場です。祈りましょう。